

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第21号

News Letter

2015年7月31日発行



写真: マラウイ お揃いのISAPH Tシャツを着て活動する村のボランティア



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



カシヘルスセンターの オープニング式典開催にあたって

ISAPH ラオス 武繁 政昭

ISAPHはラオスで10年ほど母子保健を中心に活動を行ってきましたが、この度カムアン県保健局の要請を受け、聖マリア病院の資金援助により、ISAPHの活動地の一つであるカシ地区にヘルスセンターを建設することになりました。建設工事の契約は昨年11月末に締結し、今年の2月末に無事に工事が完了しました。この度、小早川理事長、野田教授記念研修センター建設にご尽力いただいた野田佐智子様とご子息とご令孫、聖マリア病院松尾様、保健省や県保健局他約60名ご参列のもと、3月27日にカシヘルスセンターの開所式が盛大に行われました。

開所式前半では、県と郡保健局長がそれぞれ、長年のISAPHの活動に感謝の気持ちを示され、この度カシヘルスセンターの開所式を迎えることができ光栄である旨、挨拶されました。それを受けて、小早川理事長がISAPHは野田教授記念研修センターを礎としてラオスでの活動を行ってきたが、引き続き県と郡保健局と協力して貢献していく所存である旨、挨拶されました。

開所式後半では、ヘルスセンターの開所をお祝いするために、ラオスの伝統的なバーシーの儀式が行われました。バーシーでは祈祷師のお祈りの後、参加者同士がお互いの健康などを祈りながら、相手の手首に紐を結んでいきます。バーシーの儀式の後は昼食をいただきながら、カシヘルスセンターの開所のお祝いと懇親を図りました。

開所式が無事終了すると、小早川理事長、野田佐智子様とご家族、松尾様、郡保健局と一緒に野田教授記念研修センターに向かいました。郡保健局長・副局長が郡保健局の活動を紹介し、今まで野田教授記念研修センターを有効に活用させていただいていることに感謝の意を示されました。

私は昨年12月にラオスに赴任しましたが、着任早々カシヘルスセンターの建設工事管理、オープニングセレモニー準備に携わることが出来て光栄に思っています。ISAPHが長年ラオスで活動してきて、その活動が人々の健康増進に寄与し、貢献していることや、保健省、県・郡保健局等のカウンターパートとの信頼関係を築いていることを実感しました。今後もISAPHラオス事務所職員とともに、ラオスでの活動をさらに盛り上げ、人々の生活の向上と健康増進に貢献したいと思います。

最後に、野田佐智子様とご家族と今回同行させていただき、野田様ご家族の国際協力に対する熱い志に心を打たれました。また、今回の一連のハードなスケジュールにも関わらず、カウンターパートのみならず私ども職員に対しての温かい心遣いに感謝を申し上げたいと思います。



バーシーの儀式



野田教授記念研修センターでの記念撮影



開所式の後、カウンターパートと共に

ラオスの人々と共に

ISAPH ラオス 田川 薫

2015年6月、約2年間にわたるISAPHラオス事務所での任務が終了致しました。ラオスの母子保健活動に携わるのは今回で2度目になりますが、以前は病院での活動が中心だったので、村でのモバイルクリニック活動は非常に新鮮でした。

モバイルクリニック活動とは、ISAPHのプロジェクトサイトであるカムアン県セバンファイ郡の郡保健局職員およびヘルスセンター職員でチームを組み、毎月村を訪れ行う巡回診療です。私たちのプロジェクトサイトは、病院へのアクセスが困難であること、経済状況が貧しいこと、教育を十分受けていないため住民の健康に対する知識が乏しいこと、風習などから、病気になるっても病院へ通えなかったり、予防接種や妊婦健診を受けなかったり、自分たちで予防できる病気を予防できなかったりと様々な健康問題に直面しています。そこで、モバイルクリニックでは母子の健康増進を目的とし、5歳未満児の成長モニタリング、妊婦健診、健康教育、予防接種、診療、家族計画などを行っています。

こうした地域に根ざしたISAPHの活動は今年で11年目を迎え、子どもの死亡数の減少、低体重児の減少、妊婦健診受診率の増加、医療施設分娩率の増加、母親の栄養摂取に対する行動の変化といった多くの成果を挙げています。また、数値としての成果以外にも、モバイルクリニックチームの連帯感、村の保健ボランティアや村長の活動に対する理解と協力、ISAPH車輛が到着すると笑顔で駆け寄って来る子どもたち、健康教育に参加している村の人たちの生き生きとした表情な

ど、長年の活動により生み出されたものは大きいと感じています。ラオスでの任務は、ラオス側との意見の違いなどで悩まされることも多々ありましたが、こういった場面に触れると、「私たちにできることはまだまだある」と認識し、活動に対するモチベーションにもつながりました。

活動のほかに、ラオス事務所の現地職員から学ぶことも多々ありました。文化や言葉の異なるラオス人と仕事をするとは、容易ではありません。仕事に対する考え方も異なります。しかし、お互い違うからこそ学べるところは多いと感じました。また、コミュニケーションも非常に大切です。分からないことは教えてもらう、納得いかないことは納得してもらうまで丁寧に説明する、こうしたちょっとしたことが、大切だと感じました。職員がより気持ちよく仕事ができるよう、職場の雰囲気にも配慮することで、どれだけスムーズに仕事が進むかといったことも学びました。

ラオスの人々と共に母子保健に携わることができたことは、私にとって大変貴重な経験となりました。ありがとうございました。最後になりましたが、これまでご支援、ご指導いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。



村の子どもたちのナイススマイル



カシ地区カシ村で行われた帰国前のバーシーにて



ラオス事務所スタッフと



マラウイの活動地域にソーラー発電パネルと冷凍冷蔵庫を設置 ～アフリカ支援基金の助成による予防接種実施体制の強化事業～

聖マリア病院国際事業部 山崎 裕章

現在、マラウイ政府は保健政策としてミレニアム開発目標（MDGs）4（乳幼児の死亡の減少）を最優先課題の一つとしています。それには乳幼児の栄養改善が必要不可欠な課題であると考え、ISAPHは現在マラウイ北部のムジンバ県において、乳幼児の栄養改善を目的としたJICA草の根技術協力事業を実施しています。しかしながら乳幼児が適切に栄養を摂取しても下痢や肺炎などの感染症にかかることにより栄養状態が悪化し、健康状態に悪影響を及ぼします。更に栄養障害児は抵抗力が低いため、感染症により死亡に至るケースも少なくありません。ユニセフのデータによると、5歳未満児の死亡の内30%は予防接種で防げると述べています。そのようなことから栄養状態の改善と予防接種の強化が同時に行われることにより、乳幼児の総合的な健康増進が図られると考え、公益信託アフリカ支援基金の支援の下、ムジンバ県保健局と共に活動地域の予防接種体制の改善事業を実施しました。活動地域のムジンゲ村に設置されている保健施設（ヘルスポスト、以下H/P）にワクチン保管のためのソーラーパネルと冷凍冷蔵庫を設置することにより、安定的なワクチン接種の体制を整える計画です。

このH/Pは毎月1回5歳未満児の身体測定とワクチン接種を実施しています。接種するワクチンは、14Km離れた保健センター（H/C）から毎回搬送されてきました。しかし、人員不足や悪天候などにより、しばしばワクチンが搬送されないことがあったため、H/Pに対する住民の信頼は失われ、身体測定を受けずに帰宅する母親もいました。



盗難防止のため、ソーラーパネルの設置台に有刺鉄線を巻いている



設置された冷凍冷蔵庫

事前に行った調査では、既に導入されているソーラー発電冷蔵庫の多くが、バッテリーの問題（バッテリー液が補充されていない、また耐久年数を超え交換されていない）で使用できない状況でした。またパラフィンやガスの冷蔵庫も、燃料の供給が止まってしまったことから使用できないものが多々ありました。そのため、ワクチンを別の場所から搬送してもらうか、母親がワクチンを保管している保健施設に子どもを連れて行かない限りワクチンを接種できず、ワクチンで予防できる疾病の流行時には多くの児が感染してしまうこととなります。保健省予防接種拡大計画課やユニセフとどのような機種種の冷蔵庫が良いかを協議した結果、バッテリー不要機種種の導入を要請されました。

今回ムジンゲ村に設置したソーラーパネルと冷凍冷蔵庫は、バッテリーなしで夜間もワクチンの至適温度を保ちながら保管ができます。また、太陽光が無くても外気温43℃で3日間は、同様の温度を維持できます。このようなことから、この機種はWHO（世界保健機関）やユニセフから推奨されています。この導入により、近郊にある他の2つのH/Cが一時的にワクチンを保管できない状況になった場合には、ムジンゲ村のH/Pから管轄下の村々へのワクチン供給が可能となります。ワクチンの接種が常時可能な状態を提供することにより、身体測定にも参加しやすくなり、栄養改善のための活動への参加も積極的になるものと思います。

最後に、このH/Pにおけるワクチン保管で、今後多くの子どもと妊婦に計画通りのワクチン接種が実施されることを願っています。

「国際協力フェスティバル in 能古島」に参加して

ISAPH事務局 石原 潤子

2015年5月9日、10日に福岡県の能古島で開催された「国際協力フェスティバル in 能古島2015」に参加してまいりました。国際協力・国際貢献の現状や必要性を身近に感じてもらうために能古島青少年育成協会が主催し行われたイベントで、九州を拠点に活動するNGO・NPOや国際機関などが参加しました。

会場は海が目の前に広がる能古島のキャンプ村海水浴場です。立ち並ぶバンガローでは各団体が工夫を凝らして展示を行い、各国の珍しい料理や能古島の甘夏100%生絞りジュースを販売する模擬店、ネイティブ・スピーカーによる英語教室、地引網漁体験などもあり、食べて遊べて学べる盛りだくさんの内容に、多くの来場者で賑わっていました。

ISAPHは、活動を支援していただいているiサイクルの皆様と一緒にバンガローでの活動紹介やパネルディスカッションへの参加、活動講演を行いました。特に印象に残ったのが、iサイクルの学生ボランティア3名による活動講演です。iサイクル活動に参加するに至った経緯や、活動に対する想いを真摯に伝える姿に、涙を浮かべて聞き入る参加者もいるほどでした。講演をした3名の他にも、今回たくさんの学生ボランティアに参加していただき、彼らのきびきびと立ち働く姿や、来場者への丁寧な対応は非常に頼もしいもので、iサ

イクルが大切にしている「心の育成」ということを感じずにはいませんでした。

私たちのバンガローには数えきれないほどの来場者が訪れ、活動説明に真剣に耳を傾けてくださいました。中高生や親子連れの方が多かったように思います。普段は事務所内での仕事が多い私にとって、ISAPHの活動に興味を抱いてくださる方々と直接触れ合える貴重な経験となりました。

そしてイベントが無事に終わり、写真を整理しながら楽しかった2日間を思い出していたある日、嬉しいお知らせが飛び込んできました。私たちのバンガローを訪れ、スタッフが持参したマラウイの民族衣装を着て楽しそうにしていた女子中学生3名が、学校で有志を募り「国際協力部」を立ち上げたというのです！わずか数日でここまで成し遂げた彼女たちの行動力、そして志の高さに胸が熱くなりました。これから様々な課題に直面すると思いますが、仲間たちと協力しあいながら乗り越えていってくれと信じています。

いつでも、いくつになっても、「誰かのために何かをしたい」という想いがあれば、できることがあります。それは決して大げさなことではなく、私たち一人一人がほんのささやかな一歩を踏み出すだけで未来が変わっていくということを、多くの方々と共感できたイベントであったと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしいイベントに参加する機会をくださった能古島青少年育成協会の伊高様、出展にご協力いただいた皆様、来場者の皆様、「国際協力フェスティバル in 能古島」に関わる全ての皆様に感謝を申し上げます。



講演をするiサイクル学生ボランティアの岩松和歌子さん



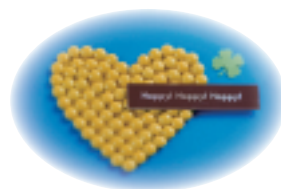
イベント終了後の記念撮影

iサイクル

寄付をいただきました

iサイクル様より、61,720円の寄付をいただきました。
ありがとうございました。

ISAPH事務局



マラウイ赴任のご挨拶

ISAPH マラウイ 村井 俊康

はじめまして。このたび、事務所長として ISAPH マラウイ事務所へ赴任しました村井俊康と申します。アフリカでの長期滞在はこれが3か国目となります。2015年3月まで、マラウイの隣国であるタンザニアにおいて国際協力機構（JICA）によるプロジェクトに従事しておりました。

現在、ISAPHではマラウイ国ムジンバ県において「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」を実施しています。プロジェクトの終了まで残り1年を切り、残された時間の中での追い込みが必要とされています。

マラウイという国ですが、金銭的に恵まれているようには思えません。国民一人あたりの年間所得 GNI は270 米ドル（2013年）と言われています。この数字はアフリカの周辺国と比較しても低いものです。しかし、そのような状況にあっても、人々は助け合って生活しています。道ですれ違った見ず知らずの人が微笑んでくれるような、ゆったりとした穏やかな雰囲気の中で、そのような人たちのために、子どもたちの未来のために何かできることはないのかとの思いを一層強くしております。



事務所への近道でもある、マラウイの自宅裏

私事ではありますが、先日、妻が日本で出産をしました。我が子は、このまま行くと肥満の域に入るのでというぐらいの勢いで母乳を飲み続けているようです。幸運なことだと思います。子の成長を測ろうと思えば自宅に体重計があります。分からないことがあればインターネットで調べることもできます。日本の母子手帳はかなり充実していると思います。それには、子の記録、母親の記録、そして健康教育に関する機能までが含まれています。

翻って、マラウイでは如何ともしがたいことが多い現状ではありますが、ISAPHは以前より、また、現行のプロジェクトを通じて地元住民と良好な人間関係を構築しています。今後は当方もその一員に加えていただき、地元の住民と一緒に考え、共に歩むことができましたらと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

帰国のご挨拶

ISAPH マラウイ 岡本 愛

マラウイ国で「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」の業務調整員として2013年8月に赴任し、約1年半プロジェクトの一員としてマラウイで活動させていただき3月中旬に帰国いたしました。以前このプロジェクト地域と同じところで青年海外協力隊として活動した経験があったため、開発途上国で活動する難しさを分かっていたつもりでした。しかし、いざ始めてみるとプロジェクトを進めていくということはその何倍も難しいことでした。こちらの活動の意図がうまく伝わらず身体測定などの村の活動に人が集まらないことは幾度とあり、その度に村人や共に活動をしている現地のマラウィアンと解決策やプロジェクト活動の内容について何度も話し合いを重ね、現地のスタッフ、カウンターパート、村人たちと共にプロジェクトを進めてまいりました。そういった粘り強い活動により、少しずつではありますが村人たちの中に「自分たちの村にいる子どもたちを自分たちの力で健康に



村のボランティアと共に

育てなければならない」という気持ちが出てきたのではないかと思います。プロジェクトが終わった後も村の子どもたちの成長を見守り支えていくのは村人たち自身です。これからのISAPHの活動が目には見えなくとも村人たちの力として根付いていってくれることを願っています。

最後になりますが、マラウイ赴任中にご指導・ご助言いただきました皆様、また、ISAPHへの支援・ご寄付をいただきました皆様へ心から感謝いたします。ありがとうございました。

ラオスとマラウイの協力活動で 感じたこと

ISAPH事務局 磯 東一郎

2015年4月2日にラオスの活動地域でMOU（了解覚書）3の報告会が実施され、聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策先生と共に私も参加しました。そこでは2012年から開始したMOU3の成果と、2005年から活動してきた約10年にわたる協力の成果の報告も行われました。母子の保健活動への高い参加率、住民の栄養・衛生に関する意識の向上、低体重児の低減や乳幼児死亡の減少などがあげられ、ラオス関係者からも高く評価されました。

ここで注目すべきは、母子の活動への参加率です。妊産婦健診90%以上、発育健診では乳児が90%以上、1歳以上5歳未満児でも80%という高い参加率を示しています。この参加率はプロジェクトへの信頼を示す値であると言えます。その信頼関係があるからこそ、住民が健康教育に耳を傾け、その結果が乳幼児の健康増進にもつながっているのです。

もう一点、カウンターパートとの信頼関係も忘れてはならない点です。国際協力はドナーと被援助側との駆け引きが活動を大きく左右します。開始当初はお互いの意見がかみ合わない場面も多くありましたが、現在ではそれが殆ど無くなってきました。それは、カウンターパートとの信頼関係によって駆け引きの落とし



マラウイ チボプリラ村の小学校で健康教育

どころがお互い分かってきたからです。この信頼関係は10年もの間、住民の健康増進のために必死に現場のスタッフが活動してきた実績の賜物です。

4月中旬からはマラウイに派遣され、JICA草の根技術協力プロジェクトの住民参加活動の推進に携わりました。村へのアクセスが厳しい中、職員は活動への母子の参加率を上げるために必死に戦っていました。いかにして住民の信頼を得るか。いかにカウンターパートとのコミュニケーションを向上させるかが大きな課題でもあります。それには村の母子の健康増進を目指し、悪路や暑さ、雨に負けず、ひたすら地道な活動を繰り返すしか方法はありません。やっていることは必ず住民、そしてカウンターパートは見ているものです。生活も活動条件もラオスより更に厳しいマラウイでの環境の中で、日々活動に努力している職員には頭が下がりました。そのお蔭でカウンターパートとのコミュニケーションが円滑になり、住民との信頼関係も築かれつつあることを実感できました。マラウイの今後が楽しみです。

平成26年度収支決算報告

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	7,007,218	
収 入	20,026,710	収入合計
収入内訳	696,000	会費など
	390,837	寄付金
	1,952,039	助成金
	16,795,531	委託事業費
	192,303	その他
支 出	17,293,371	支出合計
支出内訳	1,159,302	ラオスプロジェクト
	12,775,635	マラウイプロジェクト
	1,958,745	インターン育成プログラム
	434,022	国際協力シンポジウム開催費
	965,667	管理部門（法人税を含む）
収支差	2,733,339	
26年度末期預金額	9,740,557	

平成27年度予算

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	9,740,557	
収 入	20,010,000	
収入内訳	870,000	会費など
	2,000,000	助成金など
	16,440,000	委託事業費
	400,000	寄付金など
	300,000	実習費など
支 出	18,300,000	
支出内訳	1,200,000	ラオスプロジェクト（寄生虫対策含む）
	12,000,000	マラウイプロジェクト
	2,300,000	マラウイ予防接種強化事業
	500,000	国際協力シンポジウム開催費
	100,000	人材育成事業費
	200,000	予備費
	2,000,000	管理部門（法人税を含む）
収支差	1,710,000	
27年度末期預金額	11,450,557	

最近のできごと

2015年2月～5月

- 2月2日～4日 【マラウイ】2村において新規ボランティアを対象に健康教育研修を実施
- 2月12日～19日 【ラオス】聖マリア病院初期臨床研修プログラム「地域保健・医療分野国際保健コース」受け入れ
- 2月18～26日 【マラウイ】7村において、新規ボランティアを対象に身長体重の測定・モニタリング及び栄養に関する研修を実施
- 2月25日 【ラオス】次期活動対象地区選定のため、他郡の情報収集を実施
- 3月3日 NGOインターン・プログラム成果報告会（東京）に参加
- 3月5日～6月4日 【マラウイ】ISAPH事務局の齋藤をマラウイに派遣
- 3月5日 【マラウイ】片岡えりか氏をプロジェクト調整員としてマラウイに派遣
- 3月5日～4月26日 【マラウイ】聖マリア病院新生児科の岡田純一郎氏をマラウイに派遣
- 3月13日 【ラオス】マホソット病院管理研修事業を調印
- 3月19日～5月15日 【マラウイ】聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏をマラウイに派遣
- 3月24日～3月31日 【ラオス】ISAPH小早川隆敏理事長をラオスに派遣
- 3月27日 【ラオス】カン地区ヘルスセンター開所式を開催
- 3月30日～4月4日 【ラオス】聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏、ISAPH事務局の磯をラオスに派遣
- 4月 【マラウイ】大塚製薬株式会社様より寄付していただいた大豆食品を活動地域で配布
- 4月2日 【ラオス】MOU3報告会を開催
- 4月13日 【マラウイ】村井俊康氏をマラウイ事務所所長としてマラウイに派遣
- 4月13日～4月25日 【マラウイ】ISAPH事務局の磯をマラウイに派遣
- 5月9日～10日 国際協力フェスティバルin能古島（福岡）に参加
- 5月13日～15日 【ラオス】次期MOUのための予備調査を実施（サイブートン郡）
- 5月18日～22日 【マラウイ】7村において、新規ボランティアを対象に身長体重の測定・モニタリング及び栄養に関する研修を実施



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

—— 特定非営利活動法人ISAPH ——

【福岡事務所】

〒813-0034

福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院
監 事	竹之下 義弘	弁護士（東京六本木法律特許事務所）

【ISAPHニュースレター 第21号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。